

第 4 回「元気なまちづくり部会」会議録

日時：平成 17 年 1 月 30 日(日)

午前 10 時 55 分～正午

場所：市役所 3 階 301 会議室

出席委員

2 号委員（各種団体）岩本克巳、北之橋貴美枝、澤口寛

2 号委員（公募） 大田貞、坂部嘉紀、谷口幸生、馬場博子、寶楽陸寛

3 号委員 福井逸治（部会長）、加藤司（副部会長）

欠席委員

1 号委員 木ノ本寛、島田洋行

2 号委員（各種団体）中谷卓司

事務局

企画総務部企画経営室長：大給孝明

企画総務部企画経営室企画グループ主査：小川祥

(株)日本総合研究所

高橋秀文

【大給企画経営室長】

それでは、引き続き「元気なまちづくり部会」を開催させていただきます。

本日の出席状況でございますが、3 名が欠席されております。13 名のうち、本日は 10 名の出席ということでよろしくお願い致します。それでは部会長よろしく申し上げます。

【福井部会長】

早速議事に入ります。時間節約のために、余計なご挨拶は申し上げません。先ほど、合同部会におきまして、事務局から説明がありました。そのことも踏まえまして、基本構想（素案）これを元に意見を交換いたしたいと思っております。11 時 50 分ごろまでといたしまして、あと、次回の日程なども調整いたしまして、12 時ジャストには完全に終わりたいと思っております。

早引けの方からどうぞ。

【寶楽委員】

ありがとうございます。まず構想のこと、全体の章立てのことで、質問というか考えないといけないのではないかと思ったことがあるのですが、第 4 次総合計画とい

うのは、第3次総合計画があつての第4次総合計画だと思つたのですけれども、第3次総合計画についての反省とか達成されたものとか、総合計画があつたのに、財政再建団体になりかねないという状況に陥つたことの反省とかは、盛り込まなくてもいいのかなとは思つたのですけれども。それは、ひよつとすると、個別、具体的なことですので、その後の第3章以降に盛り込むべきことなのかもしれないのですが、どうなのかなと思つたのですが。

【福井部会長】

言っておきたいことはそれだけですか。全部言って下さい。

【寶楽委員】

それと、13ページの基本目標と書かれているものがあると思つたのですけれども、「生きがいくりの充実」という、これをもっと、生きがいでだけではなくて、もっと社会の、河内長野市、というよりも、全国でもいいのですけれども、社会に還元出来る、例えば生涯学習といった、もう少しそういう風な、ただ、生きがいでないものの方が、もっと活性化されるのではないかと思つたのです。もう1つ、「産業の活性化」ということで、確かにもともとある産業の活性化は大事だと思つたのですけれども、ここは特に「元気なまちづくり部会」なので、是非もっとビジネスチャンスの活性化、もしくは、若い人たちが色々なチャンスが持てるような感じの、ビジネスチャンスということ盛り込んでみてはと思つたのですけれども。

あと、人口推計の話がさっきあつたのですけれども、先ほどの「活動人口」、質的拡大と言うのであれば、選択と集中で、活動人口についてのもっと具体的な数値を盛り込んでみていいかなと思つたのです。以上です。

【福井部会長】

第1は、第3次総合計画の反省はないのか。第2は、基本目標は、生きがいでだけでは抽象的だからもっと具体的に。第3は、産業活性化というところでも、具体的に事例として、ビジネスチャンスの拡大というところまで踏み込めと。4番目の人口は、活動人口について、具体的な数値目標を出せと。こういうことですね。

【寶楽委員】

はい、以上です。

【福井部会長】

では、話の進み方によっては、寶楽委員はおられなくなるかもしれませんので、事務局から説明出来る限りのことは説明していただいて、皆さんの意見も聞きたいと思いま

す。

まず、第一の第 3 次総合計画の総括というか、反省すべきものではないかと。その上に立って、第 4 次総合計画があるのではないかと、その点はどのようなのでしょうか。

それはまあ、そうですね。そうとは思いますが、はい、どうぞ。

【大田委員】

総合計画というのはある意味では、理念みたいなものなのですよ。ですから、そういう中で、言葉を、今回のその素案で私も疑問を感じているので、後で言いたいのですが、けれども、要するに、「こういうことをきちっとやります」ということではなくて、もっと幅が広くて、その幅の広い中で行政が採択しながらやっている。だから、「ほとんどのことが出来ています」ということになるのですよ、項目的には。だから、その点が難しいのかなという風に思うのです。市民としたら、自分の考えているこの部分が出来てないのではないかという気持ちがあるのです。だけど、行政は何十項目という中の 1 つをすれば、「それは出来ています」という態度を取ります。だから、その点は難しいのではないかと思うのです、実際に。

【福井部会長】

このことに関してご意見はございますか。私としては、当審議会が発足をし、委員が市長から委嘱を受ける段階で、そのことは市役所内部において検討が済んでいることではないかと。そのことに立って、この原案というものが出来ておるように思いますが。もし、それを総括云々、審議会の立場でやるとすれば、第 3 次総合計画をつくるにあたっての審議会の皆様がやっていただかないことには、我々が過去のものを目標をどのように達成出来ているかを点検することには意義がありますけれども、そこからまず始めるというのは、現実的でないように思うのです。ですから、寶楽委員が、もし、ただ今のようなご質問をなさるのであれば、第 1 回冒頭の審議会あるいは第 1 回目の部会で提起していただくと、話の順番としてはいいとは思うのですけれども。

では、次の 2 番目の問題、基本目標、生きがい。次の「産業の活性化」も同じだったと思うのですが、ここの書き方は、基本的なことを書いているので、抽象的であるのはやむを得ないという気も致しますが、その後、より具体的なものはどのように書かれるのか、書かれるとすれば今、寶楽委員の言われた、障害児教育でしたか。

【寶楽委員】

生涯学習。

【福井部会長】

同音異義語で間違いました。生涯学習、あるいは、ビジネスチャンスというようなこ

とが将来的に具体的な実施計画などにおいて、書かれる可能性があるのかどうかということについて、そのほかにご意見がありましたらどうぞ。

【大田委員】

ちょっと関連になるのですけれどもいいですか。この素案というのは、事務局に聞きたいのですが、この素案が、全然誰も反対がなければ、このまま、計画書に載るということですか。というのは、色々書いてあるのですけれども、要するに私の感覚としては書き足りない部分が沢山あるのです。その部分は、これを皆が承認したら、そういう書き足りない部分はなしで、そのまま進んで行くのかどうか、ちょっと返事をいただきたいのですが。

【福井部会長】

それは、事務局から今後の全体の日程などについて言っていたきたいのですが。

【小川企画グループ主査】

はい、今回は第4回の部会、また、2月上旬には第5回の部会、それを踏まえましてまた、正副部会長の方で横の部会間の調整をしていただきまして、3月上旬には、全体の審議会で決定いたしまして、また、3月に、以前もご説明させていただいているのですけれども、パブリックコメントという形で、今回ご提案いただいて、それを当然その間で審議ですね、あと2回の部会と1回の全体会での議論を踏まえまして、加筆、修正したものを、パブリックコメントという形で、市民の皆さんに素案を提示しまして、ご意見をいただきまして、もちろん必要な修正もしていくと。当然、そのパブリックコメントが終わった後で、また審議会の方もございますので、パブリックコメントを踏まえた上での意見というのもあるかと思っておりますので、これからまだまだ修正を、あくまでも素案、たたき台でございますので。

【大田委員】

骨格の素案ですね。

【大給企画経営室長】

そうですね、加筆、修正ということは十分でございます。また、それは、先生方のご意見を踏まえまして、庁内でも議論を深めて参りたいと考えておりますので。

【大田委員】

わかりました。ちょっと本題の方に戻ります。本題は、10ページの「まちづくりの目標」で、「まちづくりの理念」という部分があります。ここの書き方は、「調和と共生の

まちづくりが理念です」と。「元気なまちづくりが理念です」と、「協働のまちづくりが理念です」という風を書いてあるのです。何のこともさっぱりわからないのです。何が問題かと言うと、こういうことを書いていたのでは、「河内長野らしいまちづくりの総合計画書をつくりましょう」と言っているのに、どこに持っていても同じものになってしまう。要するに、河内長野らしいということは、ここに1つも書いてないのです。理念というのは、その地区その地区の持ち味というものをきちっと表して、それをより魅力的にしていくためにこういう計画に移していく、その根幹になるものなのです。この、「元気なまちづくり」とか、「調和と共生のまちづくり」とか、「協働のまちづくり」とかというようなものが、これは理念ですか、一体。そのような風には考えられないのです。寶楽さん、どう思われますか。

【福井部会長】

ちょっと待ってくださいね。大田委員に司会をしていただいても構わないのですが。

【大田委員】

いえ、ちょうどこちらを見ていましたので。

【福井部会長】

まず、寶楽委員が提議された。

【大田委員】

同じことなのですよ。

【福井部会長】

同じことなのですけれども、問題の設定の仕方がやや異なるように思いますので。

基本目標に生涯学習などの記述を具体的に入れると。産業の活性化のところ、ビジネスチャンスなども入れると、この点についてはどうですか。

【大田委員】

だから、どんどん具体的なことを入れていったらいいと思うのですよ。別に、そのために何をやるかは、行政の方に任せればいいので、そういうことを目標にさせていただくという意味では、それが10ページに渡ろうが20ページに渡ろうが書いていったらいいと。

【福井部会長】

今、申し上げた2つの点について、事務局から何か申し上げることはありますか。

【小川企画グループ主査】

寶楽委員のですか。はい。「生きがいづくりの充実」につきましては、委員のご指摘の通り、ここではまだ、表現うまく出来ていないのですけれども、生涯学習、あるいは、文化活動等の充実といった点も包含した形での政策と考えております。ですから、わかりにくいという点のご指摘かと思しますので、今後の修正の中でそういったご意見も踏まえていきたいと思っております。

そしてまた、ビジネスチャンスの創造につきましては、この 12 ページ、13 ページからは書き足りない部分も確かにございますけれども、10 ページから 11 ページで、「元気なまちづくり」の理念の表現の中で、ここは団塊の世代をターゲットに絞っておりまして、委員のご指摘の若い層というのとは違うのですけれども、そういった経験を踏まえた中での、ビジネス創造。コミュニティビジネスを今後、例えば、駅前で開催していただく。これまでの経験を踏まえて団塊の世代の方が担っていただく、そこでまた若い方々の雇用も創出をしていただくと、そういう形での想定の中で書いております。

それから、理念で書くべきなのか、都市機能の方で書くべきなのか、そういう議論はありますけれども、形はそういう形でイメージしております。

【福井部会長】

では、生涯学習とかビジネスチャンスというような、具体的な言葉でもって、そのことが表現されるべきであるという意見は、十分に踏まえていただけるということ。

その次の大田委員の提起は、少し後に回させていただいて、寶楽委員の 4 番目の、「活動人口」について、数字的にもう少し具体的な出ないかということですか。

この基本構想(素案)8 ページに、「活動人口とは、人口×活動する人の数や時間」という方程式を書いていただいておりますが、これは具体的にこういう数字を出すことは可能なのですか。

【小川企画グループ主査】

8 ページに算式的なものを入れているのですけれども、あくまでも概念的な説明です。あまり人口が減っても、活動量が増えれば乗したものが大きくなるよというイメージで書いているのですが、なかなか実際には算定は難しいですね。

【福井部会長】

例えば、1 年前、2 年前に、こういう数式に当てはめるような基本的な調査があって、それを計算したところ、「その年の活動人口は であつた」というものがあつたとすると、この計画の目標年度である、平成 27 年度末の活動人口は 15 万いくら、というようなものが出てきますよね。しかし、今までそういう数量的なことをやったのがなければ、

これからそういうことも目指して、数量化するような基礎調査をどうやるのか、サンプル調査で何人かに、「あなたの活動時間は」とか、1年間を振り返る、「今年末にそういう調査をお願いするからメモしておいて下さい」、「日記をつけておいて下さい」と言って調べるとか。ある程度、市民全員に調べるわけにはいかないの、サンプルで統計的に一応やれば、今までしたことはないけれども、そういうことをすれば、寶楽委員のご意見にある程度は対応出来るのではないかと思うのですけれど。

そういうご意見もあったということ踏まえておくということによろしいでしょうか。

【寶楽委員】

とにかく、生活している人の中で、活動人口の質が高まるのであれば、そちらで書いた方が、ただの人口よりいいと思っただけなので。

【福井部会長】

はい、わかりました。

【谷口委員】

寶楽さんの、若い人で、ボランティア活動をやっておられる方は少ないと思うのですけれども、前にあそこで司会をされた姿を見て、立派だと思ったのですよ。何かきっかけは、そういうの参考に聞かせてほしいのです。何か親御さんがやられていたとか、自発的に自分でやろうとか、活動をやり出した動機は。

【寶楽委員】

やはり、僕より上の世代の、25 ぐらいの人が、僕が中学生の時に楽しそうに活発に活動されているのを見る機会があつたので、参加しました。

【谷口委員】

それがきっかけ。

【寶楽委員】

はい。格好いいとか、僕も目立ちたいとか色々あるのですけれども。

例えば、キャンプとかで僕は見たのですけれども、他にも、例えば、音楽活動をしている人であれば、「先輩が音楽活動をしているので僕もやりたい」とか。あと、生徒会とか、他に色々あると思うのですけれども。もっと皆が見られる機会があれば、「こんな出来るんや」と。何かしたいという気持ちはあるけれども、その電波を発しているのだけれども、他から出ている電波をキャッチ出来ないというか、色々な皆が。

【福井部会長】

良い先輩に恵まれておられる。

では、次の大田委員が先ほど提起されました。ここに書いてある、「何とかの理念」、この素案で言いますと、「まちづくりの理念」、10 ページからですね。10 ページの「第 2 章 まちづくりの目標」というところの「1.まちづくりの理念」、 、 とありますが、これが理念かと。ということは、大田委員のご意見は、 、 の内容に問題があるのではなくて、これらのことを理念と表現することに問題があると、こういうことなんでしょうか。

【大田委員】

置き換えれば、そういう言い方もできますけれども。

【福井部会長】

これについて皆さんのご意見を賜りたいと思いますが。

【谷口委員】

総合計画という性格にもよると思うのです。こういうようなまとめ方で、私が思うのは、あり方、理念ですよ。いき方、方針、施策と、やり方ですね。あり方、いき方、やり方をまとめていくと見れば、理念部分については、どうしても抽象的になると思うのです。施策は具体的だと。こういう形でいけば、ずっと突き詰めてゆくと、どこもよく似た表現にならざるを得ないのではないかなということ、そこで、河内長野らしさを活かした理念というのは、これは難しい部分があると思いますので、これが私はいいいとは、全面的には思えませんが、前回よりは非常にわかりやすくなって、私は方向性はこれでいいのではないかという感覚です。

要は、市民レベルでとって見れば、むしろ理念はどうでもいいということはないですけど、施策で、どういうことが身近で起こっているか、あるいは将来、どういうことが行われて疑問なり希望が持てるのか、それぞれのレベルの人が判断出来る、目で見えるものですよね。ですから、そういった形で見ると、総合計画というのは、会社でもそうですね、経営計画書をつくって、年度始めに発表して、多くのものは机の奥にしまわれて、また1年たってみたら、「前はどんなことを言っておったかな」と、出して見るといのが一般的に多いです。社員にとってみれば自分達の施策よりも、給料がどれだけ上がるとか、比較的身近なことは関心があるのです。しかし、経営者になったら、理念、「わが社は何のために存在しているのか」というところからアピールしていかないといけないのです。ですから、その辺のところの、1つの表現的な限界、ジレンマというか。私はわかりやすくまとめられたらいいと思うんです。それは理念、あり方、いき方、やり方があって、どういう関係があって整合性があるかどうかということ判断したらいいの

ではないかと、こういう風に思うのです。ですから、今回の表現、先ほどの人口水準についても、11万人～12万ということで、もちろん、財政計画的なことでは、11万で組んで、むしろ10万を切った場合にどうなるかと、市の財政がね、そのシミュレーションをやる、そういう形の方が、私はわかりやすいと思うのです。12万というのは、それを前提に組んでいくと、リスクが非常に大きくなります。ですから、万が一最悪のシナリオになった場合でも、最低限の施策が取れるとか、そういうような組み立て方の、総合計画というのは各部門の施策を羅列して、抜けがないように、あるいは、表現的にも明るくて、よそからあまり非難的なことを言われぬような格好にまとめていくのが多くなるのはもうやむを得ないことだと思うのです。しかし、実際は、今後もう、21世紀に入ったら何が起こるか分からない、まさかの時代ですよ、テレビを見ても。そういう意味では、「総合」というのは、前にリーダーがおっしゃったように、もし、家を建てるといって見れば当然、晴れの日もあるし、曇りの日もあるし、雨の日もあるし、嵐の日もある。通常総合計画で見ると、晴れと曇りがあるぐらいの前提で組み立てられている家というような感じなのです。実際の家というのはそのようなことはないです。雨もあるし、嵐もあるし、泥棒も入るかもしれないというので、それなりにきちっとした家を建てているはずですよ。ですから、そういう点で見ると、「総合」という意味は、そういったリスクに対応するという面では、何が起こるか分からない時代というのは、昔、佐々淳行さんという人が、浅間山荘事件を解決した人が、「計画は悲観的に立てて、行動は楽観的に」というようなことをおっしゃっていました。悲観的に計画を立てて楽観的に行動する。そういう面で見れば、やはり、そういう時代を踏まえて、企業であれば、今の時代であればもう、わが社は倒産するとすれば、何故倒産するかを考えて、社員にはそんなことは言わないですよ。「わが社の将来は、明るい、輝いている」という形で発表していますよね。

ですから、そういう色々な方向性を持った形で位置付けておいて、総合計画そのものは、晴れと曇りという形で、方向性で、河内長野に住もうと検討している人が見て、「ああ希望の持てるまちだな」というような形で判断していければ、そういう性格のものであってもいいと思うのです。ですから、今回の表現的にはうまくまとめられたなと受け止めていました。

【大田委員】

今、おっしゃっているのは、どちらのことを言っているのかよくわからないのですが。会社だったら倒産するという話をおっしゃいましたよね。倒産するのは、直前に物事がわかってもう遅いわけですよ。何年か前に、そういう総合計画をつくっておかないと倒産に至るかもしれないと。だから、総合計画というのは、社員が何年か前にそれを知ることが重要なことだと。しかし、この内容だと、それを知ることができないのだから。

【谷口委員】

いや、会社の経営計画と、こういった市の総合計画はと性格が違いますからね。一概には言えませんが、1つの考え方として申し上げただけで。

【大田委員】

いいか悪いかではないですよ。

【加藤副部長】

すみません、この11万人という推計が、どういう推計なのか、性格はちょっとわかりませんが、今のトレンドでいった場合、例えば、「平成 年に11万人になります」と。その時の財政規模と言いますか、「このぐらいです」と。「このぐらいで、このぐらいの人口に対して行政サービスをやろうとすると、このぐらいのことしか出来ません」と。「これはいくらなんでもちょっとひどいでしょう」と。そうしたら、最低限の市民生活を営む上で、そこそこの財政規模がいるだろうと。それを支えるのは、恐らく12万人ぐらいなのだろうと、こういう風に考えていいわけですか。つまり、幾つかの選択肢の中で、放っておいたら、例えば、11万人にいきます。これはある意味でリスクというか、行政サービスが低下せざるを得ない。あるいは市民の方の生活がちょっと悪化してしまうレベルなので、それは避けたいと。どうしても12万人ぐらいで、そこそこの財政を維持して、サービスもきちんと対応出来るだろうと。だから、「これぐらいないと、ちょっと生活しづらいんじゃないですか」というぐらいを12万人という風に考えてよろしいのですか。

【小川企画グループ主査】

まず、人口の推計の見方は、コーホート要因法を使いまして、社会的要因というか、そういう、人口の出生死亡の関係。それと経年定数の予測で立てた11万人ということで、従いまして、政策的要素は一切ございません。

【加藤副部長】

今のを放っておいたらこうなるということですね。

【大給企画経営室長】

そうです。従いまして、前に色々議論がありますけれども、人口はやはり、魅力あるまちづくりをつくれれば、流入するのではないかとという要素、そういうものはその中には反映しておりません。そして、考え方については、現在12万人です。これを何とか維持していこうという考え方に、一応なっております。財政的な話をやりますと、いわゆる

ナショナルスタンダードの行政というのは、下がりもしませんし、上りもしません。従って、ナショナルスタンダードというわけですけれども、必要なサービスについては、これから、それぞれの必要に応じて、これは行政としての役割はやっていかなければいけないと。従って、何が影響するかというのは、それ以上のサービスをどういう風に、人口の規模によって変わってくる、交付税もその分を見ていませんので。従いまして、そういう要素というのは、都市基盤の限界とか、そういうことは出てきますけれども、通常の、日常生活の財政的な面については、これは今のところ、確保されている予定だということです。贅沢は出来ないという、そういった考え方だろうと思うのですけれども。

【福井部会長】

少々元へ戻していただきますと、大田委員の指摘にはもう 1 つ論点がありまして。それは、この素案のまちづくりの理念の書き方では、本市の総合計画の独自性が出ないということ。

【大田委員】

微塵も出ない。

【福井部会長】

独自性が出ていないということは、この 10 ページの書き方に責任があるのか、他のところでも独自性ということになると、それは全体的の理念の中での独自性ということなのか、個々の具体的な計画の中での独自性ということなのかということになりますけれども。特性ということに関してのご意見は、大田委員や他の委員の方でもよろしいのですけれども、当部会でも当初に、独自性を出すべきであるという意見はあったかと思うのですけれども。総合計画全体を眺めて独自性というのは、これは、個々の具体的な計画や施策になってくれば、ある程度は出てくるかと思うのですけれども、そういうことではなくて、どこに出すべきだとか、そういうこと。

【大田委員】

そうではなくて、私の考えている理念というのは、河内長野市というまちをつくっていくために、意識として大事にしなければいけないことは何なのかというのが理念だと思うのです。ここに書いてあることは、大事にしていかなければならないということが多少は書いてあるのですけれども、具体的なことが何も書いていないのです。だから、「自然」と書いてありますけれども、どのような自然かということも書いていないのです。それから、元気なまちをつくらうということで、「団塊の世代を大事にしましょう」というようなことも書いてあるけれども、それも、内容的にどういう形で大事にしましょう

と書いていないのです。大事にしなければならないことは何なのかと。それは社会ですから、社会全体を大事にしていけば一番いいのですけれども、そのようなことは政策で出来るはずがないので。そうすると、当面そこに、理念というのは、色々なことの中からいくつかを選択して、それが理念として上がって来なければおかしいと思うのです。

【福井部会長】

つまり、この「まちづくりの理念」という、10ページの最初に書いてある3行ほどの前書きですね。ここは、要するに、簡単に言えば、質的な充実ということがありますけれども、質的な充実というのは、このペーパーが言っているところの、まちづくりの理念なのですね。そして、これでは、書き方としては不足であるとおっしゃるのか。

【大田委員】

当然ですね。不足ですね。そう申しますのは、質的充実というのが何のことなのだと
いうことか、何も読んでいる人はわからないのです。

【福井部会長】

それは、第1章で、「量的拡大から質的充実へ」とか、前提としている認識が書いてあるわけです。「本市を取り巻く時代潮流」とか。その前には、前段に、これまで本市がどういう風に歩んできたかという認識があるのです。それを理念として、質的な充実という風に、簡単に言ってしまうのですね。ですから、ここで、何と何と何をどう書くべきであるとおっしゃるのか、もしも、理念とすれば別のところで改めて書けとおっしゃるのか。

【大田委員】

ちょっと具体的には申し上げないのですが、前回のこの会議で、部会長が伝統文化ということを書いていたいただきましたけれども、「いや、伝統文化ではないでしょ、河内長野は。歴史文化でしょ」と。そういう風に書かないと、河内長野の内容というのはわからないわけです。この文章の中に、何もそういうことが書いていない。だから、別に河内長野でなくてもどこでもいいわけです。

今回、少し、国会の方で、新国土総合計画というものの話が出ていましたけれども、じゃあ、あれを1つつくっておいたら、全部がいけるのではないかというのと同じことなのです。

【福井部会長】

これはまあ、理念ですからね。

【岩本委員】

大田さんがおっしゃるような考え方もあるかと思うのですが、少なくとも、理念というのは、総合計画が10年ですから、10年間は変えることが出来ないと思うのです。しかし、実施計画は3年で持っているのです。毎年見直していくので、その時に、いかに、このアバウトなボヤツとしたものを、具体化していくかということ、そして、その時の環境によって、手法を変えたり、当然、目標も若干、やり方も変わってくるかと思うのです。

例えば、前回のこの計画を見ておりましたが、色々なそういう人口統計から見ても、大方の想像がついた数字で表しているのが、13万3000人~14万人と、17年度の人口を想定しているわけです。しかし、今は12万人少しだということで、かなりのブレがあるわけです。ですから、私は、人口にしても、そのようにこだわっても意味がないように思いますし、ある程度、最低のリスクを見ながら計画を立てて、そして、その時の状況変化に合わせて変えていくということ。逆に、今、国にしても、行政に対して、現状に合わないようなことを、平気で押し通すということもありますので、逆に、そういう弊害のないようなやり方をやっていかないといけないと思いますので、あまり、10年先のことを具体的に細かく決めるよりも、ある程度、そういうものはアバウトにしておいて、実施計画できちっと、現実に合うものかどうかということをチェックしながらやるのがベターではないかと思うのです。

【大田委員】

いや、ちょっと待ってください。実施計画というのは、チェック出来るかどうかというのは、我々にはないわけです。

【岩本委員】

もちろんそうです。

【大田委員】

たまたま、総合計画審議会の委員になりましたから、こういうことを申し上げているのですけれども、そこで我々が考えている、いわゆる市民が考えていることが入らなければ、後はチェックのしようがないのです。

【加藤副部長】

まちづくりの理念というところで、理念というのをどのように考えるのかというのは、色々な意見が分かれるかと思うのですが、少なくとも、前の方向性を踏まえて、前に、重点とすべきまちづくりの目標みたいなのところがありましたよね、中身としては、これは、多分、大田さんがおっしゃるように、前回議論をしたと思うのですが、

せっかくあそこで議論をしたやつが、必ずしも入っていないなという気はするのです。ですから、そういう意味では、もう少し、質的にこの部分を充実させないと、ちょっといけないのではないかなと。

【大田委員】

だからね、ここに3つの骨子を書いてあるわけです、柱を。3つの柱が理念ですよという風にしてしまっているのです、ここでね。そのようには書かなくて、理念というのは10も20もありますよと。骨子は骨子でまとめておけばいいわけですよ。ところが、理念というものを明確にすると、後で問題が出てくるかどうかは知りませんが、少なくとも、河内長野という地域、風土というものを考えれば、大事にしなればいけない理念は色々あるはずですよ。

【加藤副部長】

ただ、沢山大事なことはあるかと思うのですけれども、やはり、方向性というものを、その中から一定の取捨選択していく必要はあるかと思います。

【大田委員】

もちろん。だから、方向性というのが、またここで、おかしなところに入ってきているので、先ほどの会議で申し上げたのですけれども、その理念というものを挙げておいて、それを全部、方向性に持っていく必要性はないわけですよ。理念を挙げておいて、その中の、「この部分とこの部分を大事にしましょう」といって、方向性に持っていけばいいわけですよ。

【加藤副部長】

その反対もあり得るかもしれませんけれどもね。方向性を決めておいて、その中で、取り上げるべき重点を。

【大田委員】

だけど、ものすごくそれは意図的になってしまうのではないですか。

【加藤副部長】

この委員会は、総花的にならずに、ある程度の方向性とか重点は何かということを考えてもらいましょうと。僕が言いたいのは、例えば、前回の議論で歴史文化ということを行いましたよね。1個も入っていないのです。例えば、「自然との共生」とは言っていたと。でも、恐らくあの時は、この中にある、文化であるとか歴史、これも大事にしながら共生していきましょと。「それがまちの魅力ですよ」という意見があったかと思う

のですけれども、この中には、「環境」、いわゆる、「自然環境との共生」としか書いていないのです。文化みたいなものとの共生という意味はない。それから、次のところの「元気なまちづくり」で、あれを活かしましょうと言ったわけですね。せっかく、歴史・文化があって、観光客が何十万人来ますと。それを何か活かせるような方向はありませんかと。それが、「元気なまちづくり」になるのではないですかと意見があったかと思うのですけれども、これは入っていないのです。これを読む限りでは、入っていないのです。

例えば、産業と言ったら、農業だって、林業だって、豊富な資源があるわけです。これをどうやって活かすのかということも、実は、ここには具体的には書いていないのです。これを活かす時に、恐らく、ネットワークを持たないと、例えば、林業の方は持っている、農業の方は持っている。でも、本当の意味で、それをもっと活かそうとしたら、それこそ、退職された方も、その時の働いたネットワークとか、あるいは、市民グループのネットワークとか、何かそちらの方に議論が行くはずだと、僕は思っていたのですけれども、単に、団塊の世代が退職されるので、これは、知的ノウハウとネットワークを持っていますよねと。これが活かされるという形。どちらかという、NPO、ボランティアの後ろ側に引きずられた文章になっているのではないかと、ちょっと思うのですけれども。

【福井部会長】

はい、いささか整理が必要であるかと思えます。私の率直な印象を言いますと、第2章は、「まちづくりの目標」なのですね。目標というのは、かなり具体的なものです。その第1が、「理念」という抽象的な言葉を持ってきたので、「まちづくりの理念」という言葉が、その内容に比べて言葉が重たすぎるのだと思えます。

ですから、ここは、何が書いてあるかということ、それは、理念が書いてあるものではなくて、まちづくりの目標にあたっての基本的な考え方が書いてあるのだと思うのです。目標策定にあたっての基本的な考え方が。その根拠は、第1章で出ている現状の認識に立って、「潮流はこうである」という認識に立って、目標をつくるのだと、目標を定めるのだと。その目標を定める基本的な考え方というのが、「1.」であって、その考え方に沿って具体的な目標が「2.」以下に書いてあるということだと思うのです。

ですから、大田委員の言われる、ここに書いてあることの何が理念かということになるのは、ここに「理念」という言葉を置いていることのミスが、そういうことになるのであろうと、私は解釈します。

【大田委員】

部会長のご意見、そのものとしてもそうかなと思います。では、どこに理念を入れるのかということを考えなければなりません。

【福井部会長】

私の意見がそういう風ではございませんので、ここに理念という言葉を置くのがふさわしくないというのが私の意見ですけれども、仮にそういう風にしますと、理念に持たせるべき独自性はどこに入れるべきかということに絞って考えるならば、そういうことは大体、序章で、冒頭で書いておくのがいいのではないかと。

【岩本委員】

第1章で

【大田委員】

賛成ですね。

【福井部会長】

それは、我々の部会で当初、市民の理想像を書けとかというような意見もございましたけれども、その趣旨は、そういう理想像を書くことによって、理想というのは、言ってみると、誰も反対出来ないことなのです。ですから、ただ書くだけでは意味がないのであって、もし、そういうものを書くとしたら、それは、河内長野のユニークな独自性を打ち出したものでなければ、市民の理想像なんて書く意味がない、ほとんどね。何というか、誰も反対出来ないような、「皆が幸せになりましょう」のようなことを書いてもそれはほとんど意味がないのです。ただ、書いてあるだけのことで、資源の無駄遣いであると思うのです。ですから、大田委員がご提起の、この第2章の何が理念かという、理念が書いていないではないかということは、ここに書いてあることはこれでいいのだけれども、これを理念とすることを再検討すべきであるということと、それから、独自性については、個々の具体的な計画で独自性が出てくることは当然かとは思いますが、そういう個々のところだけではなくて、全体的に独自性を打ち出すような表現が必要であると。この2点を、まず、先にしたいと思うのですが、どうでしょうか。この2点は構いませんか。

【大田委員】

1つだけ言いたいのは、この序章でも、あるいは、第1章でもいいのですけれども、その辺を読んで、市民が、「ああ、河内長野というのは、これからこういうまちにしていこうとしているのだな」というのがわかるような報告書にしてほしいと。報告書というか、計画書に。一言、そういうことです。

【福井部会長】

はい。それから、次の人口問題も出ていましたけれども、移りたいと思うのですけれ

ども。

【加藤副部長】

ちょっとすいません。今のところなのですけれども、僕は、中に書いてある内容を出来るだけわかりやすく、前に持ってくるというやり方がありますよね。既に、中に書いてあるやつを、パッと見た時に、どうせ、最初の部分しか見ないのだから、ずっと何ページも読んでいて、しんどいから前に持ってくる。これは大賛成です。ただし、一番最初に、例えば、理念みたいなものを書こうとすると、これは結構大変なのです、文章からするとですね。僕は、この理念というか、あるいは、まちづくりの目標に向かっての基本的な考え方と書いているのですが、考え方の方がいいかと思うのですけれども、ここに持ってきたというのは、やはりそれなりに意味があると思うのです。過去の歴史をずっと踏まえますと。今までのまちづくりの歴史を踏まえます。環境の変化も踏まえます。この中で、1つの大きな方向としては、「量的拡大から質的充実への転換」を進めていきますと。その時のキーワードは何かと言いますと、要するに、ストックですよ。河内長野にある、人・モノ・自然・文化、こういうストックを活かしましょうというのが、ある意味で基本的理念になっているわけです。これをこう書いているわけです。もう少し質的にきっちり書いていただいたら、もうちょっと豊かなイメージーションがわくというのはあるかと思しますので、僕は是非、これを書き直していただきたいと思うのですけれども。

だから、もう1度言いますけれども、これを理念として一番冒頭に持ってくるのは、非常に構成上、難しいのではないかと。だから、ここに書くべきことをよくわかっていただくために、ちょっと抜き出して書くということには大賛成です、というのが僕の意見です。

【福井部長】

私が冒頭と言ったのは、独自性を出す言葉を冒頭にという意味であって、今の副部長のご意見は、この10ページにある、「理念」という言葉は、そのまま良いというご意見なのです。

【加藤副部長】

理念というか、基本的な考え方というかは、ちょっと中身の。

【大田委員】

この報告書の組み方というのは、先ほど、私がここで言いましたけれども、このようなところで、こういう「方向性」という言葉を使っていいのかという言い方をしました。それと一緒にもう一度、部会長会議で結構かと思しますので、検討していただきたいな

と思いますけれども。

【福井部会長】

何を検討するのですか。

【大田委員】

いえ、だから、あれば方向性ではないわけですよね、潮流とか、背景とかいうようなことが書いてあるのは。それが、そこへ、「方向性」という言葉の枠の中に入ってしまっているわけです。では、あれをどういう形にしていくなかと言ったら、当然これは…

【加藤副部会長】

意見はあるかと思うのですけれども、方向性を導き出すための環境変化について、一応、項目を挙げて、説明してきていると。書きたいことは環境変化ではなくて、その環境変化が起こるが故に、こういう方向に転換せざるを得ないと。だから、1章の中で書いていても、別に問題ではないのではないかというのが1つ。

それから、「3次総合計画の反省を書かなければいけない」と、彼は言いましたよね。ある意味で、僕は、これは3次総合計画の反省をしている文章ではないかと。1次1句、例えば、基本計画で「%達成しました」とは、書いていないけれども、ある意味で、過去の歴史などもずっと振り返って、環境変化も振り返って、「今さら3次総計みたいなものだ」と、この段階で持ち出すのは、いくらなんでもばかげていますでしょ」と。だから、方向転換をはっきりしないといけないのですよ。そういう意味の、僕はこのくだりだと思うのです。だから、この順番がわかりやすいのではないかと。普通はこのようなことをせずに、最初にバツと、それこそ理念とか、目標とかを書いて、後はズラズラっと思うのですけれども、そういう意味では、反省したという意味では、わかりやすいのではないのでしょうか。

【大田委員】

ですから、この報告書というのは、市民に見せるための報告書なのです。学者が読む報告書ではないのです。そうすると、市民が一番わかりやすい書き方をしなければならないのです。今、私が言いたいのは、これはごちゃごちゃになっているわけですよ。例えば、この「潮流」の中に、後ろにカッコで、これはどのように扱うのかなと思ったのですが、「直面する課題」と書いてあるのです。では、「本市を取り巻く時代潮流」は、全部「直面する課題」なのですかと。理解できないのです、ここのところが。課題は課題できちんと引っ張り出さないと、おかしいのではないのでしょうか。

【加藤副部会長】

言葉に対して実際の文章がきちりと合っているかどうかということについては、再検討を要するかとは思いますが、おっしゃるように。それから、市民に対して最初にインパクトがあるような形で訴えるのであれば、基本的な一番いいところですね、河内長野らしいまちづくりの考え方、これを冒頭に持ってくるということについては、全く異論はありません。

【福井部会長】

皆さん、少し、このペーパーの最初の表紙の裏の目次というところを見ていただきたいのですが、大田委員の考え方をまとめると、この目次ではこうなるべきであるという風に言っていたらわかりやすいかと思うのですが、

【大田委員】

すいません、ちょっとそこまでは考えてなかったのです。

【福井部会長】

先ほど組み替えたペーパーが出ていたように、前にいただいた骨子からは入れ替わっているわけです。それが、どのように入れ替わっているかは、これが、前のと比べたものでございますけれども、この、今回出された目次が、こういう構成になっているわけです。序章というのが出てきて。

【大田委員】

だから、ちょっと簡単に言えば、第 2 章までは、前回出されたものの形の方が読みやすいなという感じなのです。

【福井部会長】

では、まず、そういうご意見があったと。

【谷口委員】

いいですか、ちょっと関連して。第 2 章の「まちづくりの目標」と、これには少し戸惑いがあるのです。この、「理念」と「目標」という言葉から言えば、我々の経験上、理念が上位の概念の言葉で使うのです。ですから、ここをもし、こういう表現をするのであれば、「まちづくりの理念と目標」というような形でない。

【福井部会長】

それが、私が先ほど申し上げたことなのです。

【谷口委員】

「目標」という、一般的に通用する理解の言葉の配置だけ、もう少し直していただくと、要は、現状認識部分と今後の打つ手、展開策と、大きくは 2 つの部分ですから、その辺が整理されていれば、河内長野として、どのような歩みを今後、しなければならないのかというようなことが理解出来ればいいと思うのです。

【福井部会長】

では、集約出来なければしなくてもいいのですけれども、意見の形としては、ある程度具体的にしないと意見になりませんので。「このような見方もあった」、「あのよう見方もあった」というのは、部会が始まった時の話でありまして、そろそろ、結論の近づいてきた段階においては、そのような散漫なことでは仕事になりませんので。

もう 1 度、確認出来ればしたいのですけれども、10 ページの「第 2 章 まちづくりの目標」の「1.まちづくりの理念」ですね。3 行の前文があって、
、
とあって、以上 3 つが理念であると、こう書いてあるのですよね。これについては、私が先ほど集約したのは、これを理念と言うのはふさわしくないということを申し上げたので、理念というままで良いか、そのままにしておいて、その内容や書き方をもっと詳しくするのか。理念というのを、例えば、「まちづくりの基本的な考え方」というような意味合いの言葉に変えて、更に、この内容も具体化出来るものは具体的にします。

【大田委員】

部会長の意見に賛成。

【福井部会長】

その具体化について言うと、この「1.」だけでは済まないのであって、「2.都市の将来像とまちづくりの目標」というところで、更に具体的になっていくわけでありまして、そういうことでよろしいでしょうか。

【大田委員】

部会長に賛成なのですけれども、まちづくりの理念がどこかに飛んでしまうのですよ、これ、そうすると。どこかに入れてほしいのですが。

【福井部会長】

飛んでしまうから、それは、私の先ほどの考えでは、独自性を出すというのが、理念を書く場合にあって出すというのがあって、それは、序章に入れればいいのかということなのですが。

これでは抽象的過ぎるということになると、これが全国的な中で、独自性かどうかは

わかりませんが、結局は、量的なことから質的な充実への転換ということなのです、一言で言うと。それが、理念ということに相当ふさわしい内容のあることだとは思いますが、それはちょっと、独自性とは恐らく言えないと。全国、他の多くの都市においても、量から質へという考え方の転換はもう、10年ぐらい前からあることですので、量から質への転換ということを、「河内長野市の言う量から質への転換はこういうことである」ということを具体的に書ければ、相当ユニークなものになるだろうと。

僕の考えは、人口、活動人口。人口を量的に見るのではなくて、質の面から見るといような考え方を具体的に鮮明に打ち出すことで、かなり、人口が減っていきそうな時代に対して、上手な逃げ方だという皮肉もありますけれども、ユニーク性が出せるという気はしているのです。

【加藤副部長】

意見だけなのですが、確かに、量的拡大から質的充実への転換というのは、これは理念にはならないかと思えます。むしろ、理念になるのが、地域資源の循環、「循環」という言葉がいいかどうかは別にして、ストックの豊富な河内長野、ストックの活用、これは、僕は、ある意味で、理念になるのではないかと思えます。だから、ちょっと、「理念」という言葉が、人によって色々ありますけれども、少なくとも10ページのところは、それらしく、もう少し書いていただきたいというのをさっきから、何回も申し上げております。

【福井部長】

「それらしく」とは、具体的にどのようなことなのですか。

【加藤副部長】

前回もここで議論をしたような、それこそ、河内長野を前提にしたような、色々な議論が出ましたよね。例えば、歴史とか文化にしても。ですから、その辺を踏まえた形で、もう1回整理をしていただきたいということと、あと、もう1つだけ確認なのですが、これは、どちらかという、「活動人口」というのが前に出ますけれども、普通は、交流人口みたいなものを増やそうと。つまり、居住人口が減ってきたら、交流人口を増やして何とかしましょうという議論がまず出てくるのです。交流人口だったら観光ですね、という風につながてもいいのはいかがでしょうかですね。そこを言うと、活動人口の方が薄まるのであれば問題なのだけれども、要するに、人口は増やさない、量的には増やさない、既存資源を活用する、既存資源を活用する時に、観光資源を活用して、外からお客さんを呼びましょうと。そういうことによって、交流人口を増やすことで都市の活力も維持しましょうと、この2本柱がいないかどうかですね。この辺が対立しないのはいかがでしょうか

ちょっと。

【北之橋委員】

ちょっといいですか。私も思うのですが、せっかく、第3次総計との差を、1番の「まちづくりのあゆみと資源」というところで、この河内長野全体の、これ、河内長野に私達は昔から住んでいますので、わかりきっていることなのですが、これをご存知なくて、「はあ」と思われる部分は、いくらでも南の方にはあるかと思うのです。それで、これの、副委員長がおっしゃったように、この前の時は、歴史・文化といった、そうすると、「第2章 まちづくりの目標」というところの、「2.都市の将来像とまちづくりの目標」というところの、(2)の1) 2) 3) 4) 5)と書いてあるところに、何故、歴史・文化という項目が、私は、入っていないのかなと。その項目ね、まだこれから、具体策はこれの中に入りますが、私達の意見をそのようなところではなくて、6番目にそれを入れていただけてもらえば、そういう施策、副部長がおっしゃった、歴史・文化、そういうもののソフトな部分を利用して、人口流出を、それと、歴史街道ですか、そういうものを設立していけると思う思いがあるのですけれども、いかがなものでしょうか。

【福井部会長】

はい。では、時間もあまりありませんので、今日、部会で言ったことが反映されていないということを、今までの議論で言いますと、セールスポイント、歴史・文化、それから、それを、さっとキーワードで挙げてみるとわかりやすい。ですから、抽象的な意味では、含めて言っているというものはあるのですけれども、それではちょっとはっきりしないと。具体的な言葉で言うと、セールスポイントと歴史・文化と、それから。

【加藤副部会長】

色々あるのですけれども、例えば、この場合の「調和と共生のまちづくり」というのは、どちらかというところ、自然環境との共生ですよ、1点の。恐らく、ここで議論が出たのは。

【福井部会長】

簡単に言ってください。

【加藤副部会長】

活用ですよ。共生ではなくて、例えば、色々な文化であるとか自然を活用をして、それを、例えば、人を呼ぶとか、あるいは、ビジネスの拡大につなげるとか、それは、僕は、前回の会議では、随分議論されたのではないかなと。活用です、共生ではなくて。

【福井部会長】

潜在的な、色々持っている、その、活用ということが出ましたね。

【加藤副部会長】

出ましたね。特に、自然の活用をしたいと。例えば、森林がありますけれども、単に見ているだけではダメだと。

【福井部会長】

他に。はい、では、時間も来ておりますので、本日の部会は、この辺で審議を終了させていただきます。次の日程について、事務局から説明をお願いします。

(日程調整のやり取り)

では、次の第5回当部会は、2月12日(土曜日)午前10時からと決めさせていただきます。

今日は、冒頭の全体部会からの流れで、少々運営が予想通りに行かなかったところがございます。実質的には十分審議されたかとは思いますが、なお、やはり、重要なことで言い足りなかったということは、手紙で事務局の方に言っていただいたら、それを無碍に無視するということは多分ないだろうと思います。

では、本日はこれで終了します。